

故 前會長 工學博士 男爵 古市公威君略歴

古市公威君は姫路藩士、安政元年七月十二日武藏國江戸鵜設町に生る。明治二年一月佛蘭西學修業の爲め開成所に入學同三年姫路藩の貢進生として大學南校に入り引續き開成學校にて普通諸學科を修業す同八年七月諸藝學修業の爲め佛國留學を命ぜられ同年九月佛國巴里着エコール・モンジュに入學エコール・サントラルの豫備科修業、同九年七月エコール・サントラル入學、同十二年八月アンジェール・デアール・エ・マニユファクチュール の學位を受く、同十二年十一月巴里理科大學へ入學リサンシエ・エス・シアンスの學位を受く、同十三年十月歸朝し直に内務省に入り御用掛被仰付同十四年六月土木局事務取扱兼文部省御用掛仰付られ東京大學理學部講師の任を囑せらる、同十七年三月阿賀川流域、信濃川流域、庄川流域の直轄工事監督被仰付、同年七月内務三等技師に任ぜられ同年九月従六位に敘せらる、同十九年五月工科大學教授兼工科大學長内務二等技師に任ぜられ奏任二等に敘せられ同年七月正六位に敘せらる。

明治二十一年五月最初の工學博士の學位を授らる同年十一月山縣内務大臣に隨行歐洲諸國を巡回土木行政に關する制度調査をなし同二十二年九月歸朝、同二十三年六月内務省土木局長に任ぜられ土木行政及土木事業施行の組織を定め工科大學長を兼任せらる。

明治二十三年九月貴族院議員に勅選せられ 同年十一月夙に土木學を研究し第三回内國勸業博覽會審査官として其功勞顯著なりとし藍綬褒章を賜はる 同二十七年六月内務省土木技監に任ぜられ高等官二等に敘せらる、同二十九年三月藍綬褒章飾版を賜はり同年十月東市塞國コンマンドル・ド・ロルドル・ロワイヤル・ジュ・カンホシユ勳章を受領し及佩用を允許せらる、同三十年一月勳三等旭日中綬賞を授けらる 同三十一年逓信次官に任ぜられ高等官一等に敘せらる 同三十二年六月鐵道會議々長仰付られ三十三年五月逓信省總務長官兼逓信省官房長に任ぜらる 同三十四年丁抹ダネプログ一等コンマンドル勳章佩用允許同三十六年三月東京帝國大國名譽教授の名稱を受け鐵道作業局長官に任ぜられ帝國鐵道協會副會長に選ばる、同三十六年十二月京釜鐵道株式會社總裁仰付られ同鐵道の速成に努力し日

露戦役に對し多大の貢献を齎らし其功に依り勳一等に叙せらる、同三十八年十月韓國勳一等太極章佩用允許、同三十九年六月帝國學士院會員を仰付られ韓國統監府鐵道管理局長官に任ぜらる、大正三年九月土木學會の創立に當り最初の會長に選ばれ、大正三年六月從三位に叙せられ、同五年三月佛國レヂヨン・ド・ネウル三等勳章を受け、同六年十月理化學研究所長となる。

大正八年十二月勳功に依り特に男爵を授けらる、同九年五月中華民國一等大綬嘉禾章を受け、同十三年一月樞密顧問官に任ぜられ、同年五月帝國鐵道協會名譽會員に推舉せらる、同十五年十一月佛國レヂヨン・ド・チルル二等勳章、白耳義レオポルド二世一等勳章を受け佩用を允許せられ、昭和二年十二月正三位に叙せらる。

昭和三年六月日佛協會理事長に推舉せられ、昭和四年一月旭日大綬章を授けらる、同年七月アメリカン・ソサイテイ・オブ・シヴィル・エンジニアス名譽會員及イングリッシュ・インSTITUTE・オブ・シヴィル・エンジニアス名譽會員に推薦せらる同六年二月秩秩寮審議官仰付られ、同七年從二位に叙せられ、昭和八年一月土木學會名譽會員に推舉せらる。

實業界にありては金剛山電氣鐵道、東京地下鐵道、九州水力電燈、相模紡績、大正水力等の社長取締役相談役等に就任し又各種の審査官、調査委員、會議員、顧問、囑託等に任ぜられたるもの及び功勞に依り金銀杯、一時賜金、記念章等を賜りたるもの枚數に迫なし、君の功績の顯著なるを擧ぐれば内務省に在りては土木局長又は技監として本邦河川港灣修築と土木行政の基礎を確立し、工科大學第一回の學長として高等教育に盡力し、日本工學會の創設、昭和四年萬國工業會議及世界動力會議を我國に開催の如きは君の力に負ふ處甚だ多く、工學院を創設し管理長として多年我國工學の普及技術者の養成に貢献し又土木學會の創立は君の發意に係り其最初の會長として力を盡されたり。

昭和八年疾を得て遂に起たず昭和九年一月二十八日澁谷區常盤松の邸に歿す享年八十有一。

三長きあたりに於ては男病氣危篤の趣き聽召され御見舞として葡萄酒を賜はり並に生前の功勞を思召され特に旭日桐花大綬章を授けらる。

君は觀世流謡曲の名手として聞えあり、遺族は未亡人と七男三女の子福者である。